

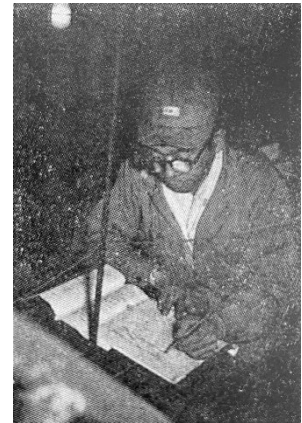
ウアツハツハ具体・4

—上前智祐—(つづき)

嶋本昭三

ぼくは前衛美術というものは“カッコイイ”ものとは思っていない。具体の運動もカッコワルくてバカバカしくて、でもその中にゼツタイすることが出来ない魅力をもっているものである。苦心サンタンしてもどしどし売れるわけでもないし、カンタンにこの魅力がひとに伝わるものではない。伝わるどころか軽薄のレッテルをつけられるくらいがオチである。だからこの世界に入ってもすぐに売れる方向とかカッコいい方に転向してしまう。ことばをかえていうなら、これは道楽の中の道楽といえるかも知れない。

だから生活が苦しくなってくると一ぺんにふっとんでしまうものである。しかし、ここに苦しいからこそ、具体をつづけたという男がいる。



具体では特異な彼のポートレート

●灰を飯にまぜて食べる●

上前智祐、1920年に京都で生まれた。1オのとき父が亡くなり養父が炭焼きであったので山中でそだてられた。4オのとき耳を患い、そのため生涯難聴になった。6オのとき母親も病気になり天理教にこもってしまった。このとき奥丹後の大地震があり倒潰寸前に90オの巫女が彼を連れ出して奇跡的に助けられた。

養父が韓国人であったので韓国人の子として扱われ、その後堀方、山下方、又別の堀方、永浜千代蔵方と住居を転々とかえ、その後、母が行者の谷市蔵と四国巡礼に出たため仏心寺の住職谷祖忍に預けられた。(編注:「方」は地名ではなく、「~の家」の意味)ここで彼は住職夫婦に長煙管で頭を叩かれたり赤子を背負わされたり暗闇に放り出されたり、手きびしい躰けをされていじけた生活がつづいた。

11オのとき母と谷市蔵と共に住むことになるが、市蔵の信仰により大きな神段の前でホラ貝とシャクジョウのなる中でお経を唱え又、寒中に冷水を浴びせられたり線香灰を飯にまぜて食べさせられたり神刀をなげつけられたりして、中舞鶴の町を素足でにげまわり山路をこえて海辺でひとりたたずみ、はるか暗い海を眺めて涙ぐむ日がつづいた。

13オのとき京染悉皆店の奉公人として夜おそくまで働かされ、ついに重い脚気になった。その後大泉旗染店、西山洗張店、福井屋クリーニング店、杉野洗張店、大阪屋洗張店など転々とするが、その頃模写や肖像画に興味をもち、また南画を小室翠雲の通信講義録で学ぶようになった。

18 オのとき新年会で酒を呑みすぎ、路上に血を吐いて倒れる。このとき医師は明日までの寿命と診断し、焼場の人に手渡され、翌日焼場で意識を回復し彼らをおどろかした。その年沖仲仕に転職、毎朝革靴で蹴り起こされて疲れた身体をひきずるようにして作業に出る。親方に貸した金時計を返してくれとってアベコベに叩きのめされる。この年近くのバー「金星」で暴れて店内をメチャメチャに叩きこわして駐在所に連行された。

●血でかいたラブレター●

24 オのとき舞鶴海事経理部に使丁として勤務、お金がないのでいつも昼食なしですごく、隣の席に美人の岡田梅代がおり皆から羨しがられる。彼も彼女の魅力にほれこみ自分の血でラブレターを書いて結婚を申し込んだが、こわがられて失敗する。

27 オのとき二紀展に初出品し、黒田重太郎に学び本格的に絵をはじめ。

29 オ、宮津市太田病院の看護婦と結婚したが、妻は母の看病のため別れて暮す。

30 オ、麻酔なしで鼻の中を手術して脳貧血をおこして倒れる。その頃、毎朝一番電車にのって途中の駅でおりて絵をかき会社にかけて夜おそくまで働く日がつづいた。翌年5月10日、この日も一番電車にのろうとするとドアがしまり戸にしがみついていたのっているうちに、電柱にぶつかり転落、下顎骨と鎖骨を骨折、重傷。

川崎重工業につとめ、クレーンを運転する。高所で危険な作業で重労働であるが絵をかきつづけた。

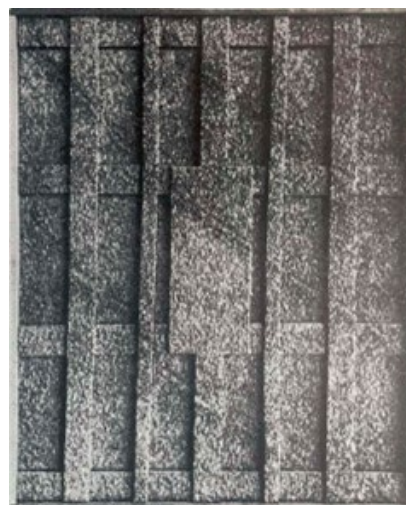
その後斫(ハツリ)工に転職。工場内ではみなから敬遠される職種であったが、彼自ら希望してこの職につくが、作業中にとび散るドライ粉が瞳に突きささる。またエヤハンマーによって手がふるえ出し、熔接を行っているときシンナー暴発により顔を焼く。

その後もきびしい仕事の合い間での制作がつづく。最近ばくと大阪で別れたあと、電車をのりすごして明石までいき、戻って大阪行の電車にのったが又のりすごし、やっと自分の駅に着いて、無灯の単車で帰宅する途中暗闇のカーブで転倒、左足重傷。その後胃炎になりテンテキを打って静養。

書けば、きりがないが、このような中に独力で山をきりひらいて家をたてアトリエをつくり、そして純粋な絵をかきつづけていることには頭が下がる。1953年、吉原治良の門をたたき54年具体の運動に参加した頃より、本格的にこの道にのめりこんだ。

彼の作が高く評価されたことは、前号にも記したが、国内でも阿部展也、広井力などの作家や画廊が注目し、絵が大々的に売れるチャンスがまわって来た。

しかし吉原治良はこれを断るようになりに彼に伝え、又もきびしい道がつづくことになった。それは今もつづいているがますます制作には油がのっている。彼の作品には行為そのもの



板の上にえのぐを重ねていった作品(1972)

を芸術だとするパフォーマンスやとびまわって描いたりするアクションペインティングのような
具体の最も脈手な身振りがないので、そのいみでは地味な存在であるが、長針だけの腕時計
を腕にまいて、なりふりかまわぬ彼の生き方は、何よりのパフォーマンスである。

<関西女子学園短大教授>

『未生』1974年4月号掲載／『孤立の道』に転載(1995年)

*縦書き原稿を横書きに改めたため、数値表記の一部を漢数字から洋数字に改めています。